

こだわりの一品！ 軒丸瓦のきまるがわら たんべんじゅうにべんれんげもん【良田平田遺跡】

軒丸瓦は、古代の寺院・駅家などの屋根の軒部分に使われた瓦です。この瓦は、「単弁十二弁蓮華文」という 12 枚の花びらを持つ蓮の花をかたどった文様が特徴です。この瓦と同じ特徴を持った瓦は、良田平田遺跡からやや西にある吉岡大海廃寺よしおかたいかいはいじ うまや（駅家との説もある）（鳥取市吉岡温泉町）や寺内廃寺てらうちはいじ（鳥取市鹿野町寺内）の瓦と同範*、上原遺跡及び上原南遺跡かんばら かんばらみなみ（鳥取市気高町上原）の瓦と同系統と考えられています。

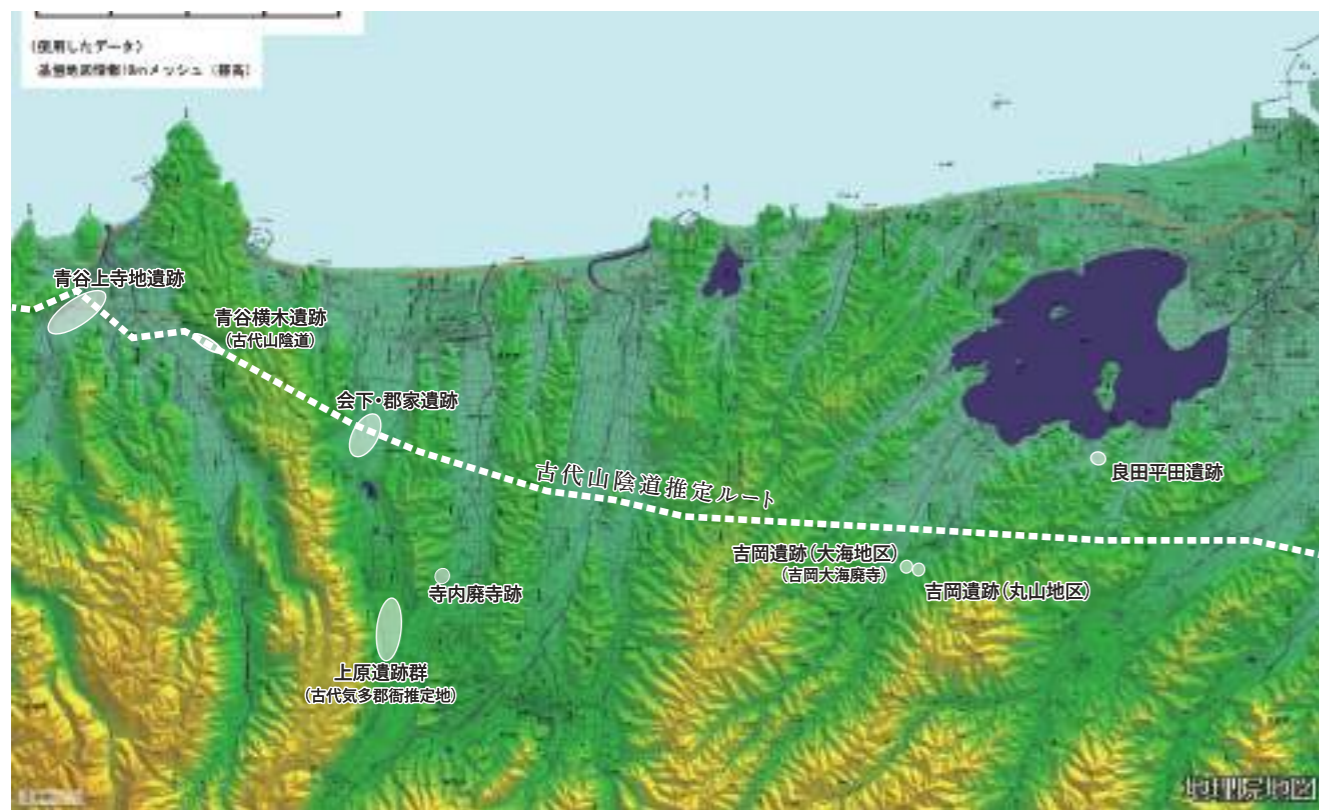
鳥取市の西地域で瓦の文様が共通することから、当時（7 世紀末～ 8 世紀初）のこの地域のあり方や古代山陰道との関わりを考える上で重要です。

ただし、現時点では良田平田遺跡からは 1 点しか出土していないため、建物がどこにあったのか、どんな建物（寺院か役所か）だったかなど、まだ謎が残っています。



← 軒丸瓦の出土状況

DATA
 単弁十二弁蓮華文軒丸瓦
 最大長：11.6cm、最大幅 16.8cm、最大厚 3.3cm
 瓦当裏面ナデ調整



良田平田遺跡出土軒丸瓦 関連遺跡分布図

新春特別展示企画第2弾！ 調査担当者こだわりの一品！

PartIII 良田地区の遺跡 良田平田遺跡・良田中道遺跡

良田中道遺跡・良田平田遺跡は、鳥取市の湖山池南岸に向かって延びる細長い谷の中にあります。谷の低い部分には河川跡や水田跡、丘陵の際には集落跡が見つかりました。

良田地区での人々の活動痕跡は高住地区に次いで古く、良田中道遺跡で縄文時代前期末（約 5,500 年前）の土器が発見されています。

丘陵に挟まれた谷状地形であるため、古くから水害に遭いやすく、弥生時代から古墳時代にかけての護岸工事の痕跡が良田中道遺跡で見つかっています。

古墳時代以降は良田平田遺跡で集落が営まれたようです。特に古代の木簡や墨書土器などの文字資料や、円面硯、銅製帯金具など役人または役所に関連する遺物が多数見つかり、鳥取県東部の歴史を考える上で非常に重要な遺跡です。



■ 注目の展示品

土製支脚どせいしきゃく【良田平田遺跡】

土製支脚は、2つないし3つを組にして、煮炊きを行う際に火にかけた土器（甕）を支える（ガスコンロの五徳のような）ものと考えられています。



土製支脚（正面）



土製支脚使用イメージ

鉄滓てつさい（流出溝滓、梔形鍛冶滓）りゅうしゅうこうさい わんがたかじさい【良田平田遺跡】

流出溝滓は砂鉄から製鉄を行う際に出る（製鉄炉から鉄を流すときに残った）もので、梔形鍛冶滓は鍛錬鍛冶を行っていたことを示すもの（鍛冶炉の下に溜まるもの）です。遺跡からは鞆の羽口や鉄滓が付着した土器も発見されており、遺跡内で製鉄や鍛冶を行っていたことがうかがえます。



流出溝滓

梔形鍛冶滓



鍛冶作業の様子

良田中道遺跡

遺跡は湖山池南岸の細長い谷にあります。調査の結果から、縄文時代から中世にかけての遺構と遺物が発見されました。

最も古い土器は縄文時代前期末（約5,500年前）のもので、以降縄文時代中期から晩期までの土器も出土しています。これより当時から付近で人々が活動していたことがうかがえます。

弥生時代から古墳時代には、木製の水利施設のある溝を造り、木製構造物を設置するなど水をコントロールして、当時では米作りに向かないこの土地で水田開発を行っていたようです。古墳時代後期（6世紀）以降は、狭い自然地形を利用した水田区画が、現代の圃場整備が行われるまで踏襲されたと考えられています。



良田中道遺跡全景（南西から）

DATA

所在地：鳥取県鳥取市良田字中道
調査面積：5,710㎡
遺跡種別：集落、生産
主な時代：縄文時代～中世
主な遺構：自然流路、溝、土坑（縄文時代）、掘立柱建物跡、溝、土坑、木製構造物、水田、自然流路（弥生時代）
溝、土坑、水田（古墳時代）、水田（古代～中世）

ぎじけいはん 擬似畦畔

畦畔とは水田の「あぜ」のことを指します。擬似とは本物とは違う似ているもの、ということで、本来の「あぜ」ではないけれど、あぜと同じように見えるものです。

水田耕作では、水田面は何度も鍬などで土が攪拌されますが、あぜの部分は土を盛るため、その下の土は攪拌されません。こうして発掘などで上の土を取り除くと、攪拌された水田の土とあぜの下で攪拌されなかった土がはっきり見えることがあります。

良田中道遺跡で見つかったくねくねと曲がる遺構は、村絵図にもラインがはっきりと描かれており、かつての水田畦畔の形状だということがわかりました。



荒田村絵図（明治時代）鳥取県立博物館蔵を一部改変
左上は拡大図（青線は良田中道遺跡の調査範囲）



曲がりくねった擬似畦畔

良田平田遺跡

遺跡は湖山池南岸の細長い谷の中にあります。検出した最も古い時期は弥生時代で、溝や弥生土器のほか、石器や木製品などが出土しています。

古墳時代には掘立柱建物跡や井戸を確認しており、須恵器・土師器のほか勾玉・管玉などの玉類も出土しています。

遺跡の最盛期は古代（7世紀末から9世紀頃）で、良田地区の旧地名である「荒田」と記された墨書土器や、中国地方最古と考えられる「前白木簡」、国郡郷及び人物の名称が記された記録木簡が見つかるほか、円面硯、銅製帯金具など古代の役所に関連したものが多数出土しています。



良田平田遺跡全景（南西から）

DATA

所在地：鳥取県鳥取市良田字平田、稲場、口宮ノ谷
調査面積：6,290㎡
遺跡種別：集落、その他
主な時代：弥生時代～近世
主な遺構：溝（弥生時代）、掘立柱建物跡、土坑（井戸）、自然流路（古墳時代）、掘立柱建物跡、溝、土坑、水田（古代）、水田（中世以降）

ほったてばしらたてものあと ちゅうけつ 掘立柱建物跡の柱穴

良田平田遺跡では古代の掘立柱建物跡が複数見つかっています。中には写真のように柱の根元が残っているものもありました。

柱の根元の周りに石を置いたり、柱の下に石を置いたりして、^{ふとうちんか}不同沈下（柱が不揃いに沈むことによって、建物が傾くこと）を防止する工夫が行われています。



3区 掘立柱建物跡 1・2



柱根と根石検出状況



礎盤石検出状況